

退職教員思い出の記

論理学を必修の教養基礎科目に！



立花 希一

(昭和62年から31年間在職)

日本の大学教育は教養科目と専門科目からなるが、西洋中世以来の学問の伝統を做った制度である。12世紀ルネサンスを代表するシャルトル学派では、教養(リベラルアーツ)として、論理学・文法・修辞学(基礎)と算術・幾何・音楽・天文学(上級)の七科目が置かれ、専門(プロフェッション)は、医学・法学・神学に分かれていた。医者と法律家は今日でも専門職の代表であるが、フアイヤアーベントが喝破したように、現在では西洋でも科学者が聖職者にとって代わっている(キリスト教国ではない日本では、そもそも聖職者の影は薄かった)。

教養七科目のほとんどは高等学校までの教科(数学〔算

術・幾何〕や音楽)にあるか、教科(文法・修辞学は国語、天文学は理科)の中で若干は触れられるが、唯一教えられていない科目が「論理学」である。アリストテレスが完成させた論理学(三段論法)は、古代・中世・近代まで一貫してあらゆる学問にとって必要不可欠の基礎であったし、さらに、一九世紀以降、革命的発展を遂げた記号論理学(命題論理学・述語論理学等)は、アリストテレスの伝統的論理学に代わる新たな論理学として、西洋の大学では現在、何らかの形で必須の科目として開設されている。

ところが、日本の教育では、論理学の重要性に対する意識が希薄である。私が三十一年間奉職した秋田大学では、論理学は教養科目の一つとして開設されているものの、秋田大学のほとんどの学生が、論理学の「ロ」の字も知らずに卒業するのが実情である。これは、西洋人の学問に対する見識・態度とあまりにもかけ離れていると言わざるをえない。論理学があらゆる学問の基礎にあるのは西洋では常識だが、日本ではあたかも非常識のようだ。

「論理学を全学部必修の教養基礎科目にすべきである」などと、退職後の今頃になってこんな提言をするのは遅きに失しているのかもしれない。しかし、実は今からでも遅くない。もし秋田大学が教養基礎教育科目の必修として論理学を開設すれば、少なくとも日本では遅いどころか先駆けである。一退職者によるこの問題提起を議論していただけるとしたら、望外の喜びである。